

2013年4月号・季刊39号
ミンダナオの風
執筆編集*松居友/松居陽/大野民希



あなたと偶然出会ったことで
あなたの人生と私の人生とが
一つの糸でつながって
愛と友情で絡み合いながら
想像も出来なかった将来が
願っても願っても
かなえられなかった未来が
ヒナイヒナイ バスタ カヌナイ
ゆっくりゆっくり 切れることなく
永久とわかに向かって歩み始めた
私の生きている時間と
あなたの生きている空間とは
とつてもかけ離れているけれども
違っているからこそ
お互いに支え合い
お互いに助け合い
お互いに愛し合って
今の厳しい困難を
手を取り合って超えていける
あなたと偶然であったこと
あなたの人生と私の人生とが
一つの糸でつながって
愛と友情で絡み合いながら
想像も出来なかった将来が
願っても願っても
かなえられなかった未来が
ヒナイヒナイ バスタ カヌナイ
ゆっくりゆっくり 切れることなく
永久とわかに向かって歩み始めた

今年の4月20日で、ミンダナオ子ども図書館は、10周年を迎えます。

そのことを記念して、10月か12月には、皆さんに松居陽が制作したドキュメンタリーDVDをお送りしようと計画しています。テレビで放映された画像も入れて・・・ご期待ください。

10周年は、やはり節目。気持ちの上では、ようやく基礎が出来上がって、これから家を建てようと言う時。今年遠征を迎えた60歳の木工としては、気の入れ時かもしれません。86歳で現役の父曰く、「まだまだ、これからだね・・・」

ようやく出来上がったきた基礎を再点検して、しっかりと整える時でもあり、今号では、スカラシップ支援の理念を紙面で確認することにしました。

MCLのスカラシップは、他のスカラシップ支援とは、だいぶ違っている面が多いので、支援者の方々、特にこれから支援してくださる方々に、よく理解していただいていた方が良く感じるからです。読み語りを根幹にここ10年、MCLは多くの僻村とつながり、スカラシップ、医療と保育所建設、植林へと活動を展開してきましたが、訪問者も急激に増え、いよいよ文化と農業を通して、ミンダナオから世界の人々に、風を送るときが来たと感じています。

ミンダナオ子ども図書館の基幹をなすのは、読み語り。活動の中心は、子どもたちや若者たち。

読み語りをする場所は、山奥の先住民の極貧集落だったり（徒歩や馬で行くときもある）、イスラムの反政府地域で、一般の人々やNGOでも入れない湿原地帯だったりする。僻村のなかでも僻村、極貧のなかでも極貧、危険な中でも最も危険な戦闘地域だったり・・・

「なぜ、日本人がたった一人で、そのような地域に入れるのか」と、よく聞かれるが、最初はおぼくも、興味はあっても絶対に入れないと思っていた。

しかし、10年間、ただひたすら貧しい子どもたちのことを想い、戦争や極貧からくる家庭崩壊で劣悪な生活環境のなかに、本人の意志に反して置かれてしまっている子どもたちのために、時には戦禍をかくぐって活動していると、それがたとえ、有名な反政府や戦闘地域の村々であったとしても、人々が心を開いて受け入れてくれる。

そこまでくるのに、確かに10年はかかった。そのような活動を、日本人が一人で出来るわけはなく、活動の中心を担ってきたのは、現地の子どもたちや若者たちだ。スカラシップを始めた理由も、現地の若者に頼るしかなかったからだ。

（初期の頃、日本人のおぼくは荷物運びと運転、ときには便所掃除や洗濯・・・）
現地法人の資格を取ったのも彼らだ！

現地で読み語りをする時、集まってくる子どもたちの中に、「これはひどい、何とかしてあげたいなあ」という子どもたちが出てくる。

戦闘で避難民化していたり、極貧で現金収入がほとんどなく、病気になるっても薬も買えず、学校にも行けず、日々の食事や服にも困っている子どもたち。

そのような子どもたちを目の前にすると、どうしても放っておけない。それがスカラシップや医療、古着や植林プロジェクトを始めたきっかけだった。

寄付の90パーセントは、個人寄付で、JICAやODAの予算を預かって学校建設などをするときにも、人件費を含めていっさい現金は受け取っていない。

（政府の予算は国税だし、寄付はすべて現地へがモットーだから！）

MCLの根幹は自由寄付。

まずMCLの寄付について復習してみると。最終ページにもあるように、寄付の種類には、自由寄付、スカラシップ、里子支援、保育所・下宿小屋支援、植林支援、物資支援などがある。

だが、支援の根幹は自由寄付。

自由寄付は、親のいない子や学校が遠くて通えない子たち120名と一緒に生活している本部の食費。遠くで学校に通えない高校生たちのための、男女二カ所の下宿小屋、大学生の町の下宿施設。お屋のお弁当を持っていけない村の子たちの炊き出しの米など、すべての子たちを合わせると250名あまりの子たちの米代（一日100キロ以上の米が消費される）や生活維持費だけではなく、広範な活動範囲を支えるガソリン代、車の維持修理費。スタッフの外食費（一人100円の上限がある）さらに加えて620名を超える子どもたちや関係している多く



振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」または「里子」と書いて一部振り込んでいただければ、支援学生を紹介。機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、6月に成績表、8月に写真、12月に絵手紙。里子支援は、8月に写真、本人からは、12月に本人が描いた絵手紙が届きます。訪問の際は、自宅にご案内します。支援停止は、いつでも可能です。



の僻村の子どもたちの手術まで含む医療費（去年は130名ほど、医療費は毎年総額は、150万円ほど。大規模な戦争が起これるともっと大変）、緊急の戦争や洪水避難民救済費などに使っている。

貧困集落のもう一つの大きな問題は、学校に行きたくても行けない子どもたちがたくさんいること。

行けない理由は、現金収入がないので、学用品が買えない。一日三食食べられないのにお弁当など持っていけるわけがない。学校まで遠くて通えない。貧困といっても、豊かな日本に比べると

想像もつかない状況がここにはある。米は買わなければならないので、当然ながら現金収入がなければ食べられず、自然薯を掘って一日二食で食いつなぐ。特に父親が死んだりいなくなったりした母子家庭は深刻だ。

鶏肉を食べられるのは年に数回、父親の誕生日やクリスマスの時だけ。日常は、沢で捕れるカエルやカニがごちそうで、普段は、ワラビなどの山菜をおかずにするけど、調味料の塩や醤油や油もなかなか買えない。そのせいか、山の子たちは小柄でやせている子が多い。

年齢がくると小学校に登録するものの、2年生になると多くの子どもが学業停止。理由は、午後の授業が出てくるとお弁当を持っていけないから。

読み語りで、そんな子どもたちの現状を見せつけられると、「何とかして、この子どもたちが望む学校に、通わせてあげたい。」「高校卒業すら、夢のまた夢、だからこそ、出来れば大学まで行かせてあげたい。」と考えてしまうのは、ほくだけだろうか。

大学に行けるのは、20パーセントにも満たない金持ちだけだ。

大学を出たからって、ぼくは特別な事だとは思わないが、こんな不平等を見てみると、彼らにこそ大学に行ってもらい

たい、そして、少しでも社会を変えてほしい、と思った。スカラシッププロジェクトの始まりだった。

スカラシップ支援は、大学から高校へと下がっていったが、極貧の村を訪ねるにつけて、貧困世帯の子どもたちは、小学校すら卒業出来ない状況を見るにいたり、「これは、小学生の支援から始めなければ、スカラシップも意味がない」と感じ、小学校の子どもたちに教材や、ときには炊き出し用の米をとどける里子支援を開始した。

そうした結果、現在、奨学生の数は、小学校から高校大学まで620名あま



り。増やそうと思ったことは毛頭ないが、現地でも子どもたちに出会うとどうしても放っておけない性格が災いして？この人数になってしまった。

しかも、まだ支援者が見つからないのに、見かねて採用するものだから、支援者がいないにもかかわらず、自由寄付で学校に行かせてあげている子どもだけでも200人を越えている。

それでも、がんばって無理をしても奨学生を採ってきたもう一つの理由は、MILF（モロ・イスラム解放戦線）などの戦争地域特に舟でしか行けないリグアサン湿原、やNPA（共産ゲリラ）の跋扈するアポ山周辺の山岳地域では戦闘が絶えず、こうした極貧の村々と信頼関係を持つことによって、戦渦のときに安全に子どもたちの救済活動に走ったり、その後の平和構築のためにも、現地の子どもたち親たちと密接に関わりをもてるスカラシップや里子支援は非常に有益だということが体験からわかったから。

本来ならば、外国人が入れないような地域でも、私たちを受け入れてくれるのは、現地に奨学生たちがいて、村人たちと信頼関係が出来ているから。

また、40年にわたる戦闘で閉ざされてきた反政府の村々も、子どもたちが高校から大学にまで通えるようになるという、信じられないことが起こることです。

子どもの紹介は、ウェブサイト 検索「ミンダナオ子ども図書館」の「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にさらに多く、順次最新の情報も載せています。 入るためのパスワードは、「mindanao」です。 サイトからそのままメールで現地スタッフと、支援する子どものご相談と確定が可能です。

外部世界に心を開く縁となって行くことがわかる。MCLが読み語りをしたり医療をしたり、学用品などを届けに定期的に来るようになってから、村が明るくなったケースが多い。

MCLのスカラシップでは、高校生と大学生は、2ヶ月に一回、総会に本部に集まる。

総会は、奇数月の最終日曜日です。良かったら参加されてください！

5月がシンポジウムで、平和や貧困についてグループ討論をする。7月が先住民族の文化祭。9月が移民系クリスチャンの文化祭。11月が卒業生も交えた奨学生の日。1月が、イスラム文化祭。3月が、卒業送別会。

こうした文化祭を行う理由は、学校教育だけでは、異文化や異なった宗教間の理解や交流が出来ないからで、ミンダナオ子ども図書館の最大のスカラシップの特徴の一つは、学生総会にあると言っても良いだろう。



こうした交流を通して、普段は相容れないと思われていたイスラムやクリスチャン、文化が違うと軽蔑していた移民や先住民族が、敬意を持って理解し合い、共感しあえる場が作られ、それがひいては平和構築の実践へと向かっていく。

学校教育だけで平和が作られるのであれば、すでに先進国は武器を持たず、世界はとっくに平和になっているはず。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの、もう一つの変った採用基準は、成績の優秀な子より、親のいない子や片親の子、崩壊家庭の子たちを優先していることだろう。

スカラシップも里子支援も、採用基準は、極貧家庭の中でも、特に厳しい環境に置かれた子たち。

- 一、孤児片親の子、崩壊家庭の子。
- 二、両親はいても土地もなく極貧で、
- 三、食たべられない家庭の子。
- 三、絶えず戦闘や戦争にさいなまれ

平和構築に重要な意味を持つ地域の極貧集落の子どもたち。

例をあげると、戦闘で目の前で両親や兄弟が殺され、自分も腹部を撃たれてMCLに来た子。父親が殺された子は結構多い。父親や母親が町に行ったままだくなり、母子または父子で、苦勞してきた子は数知れず。親の中には養育不能や



伝いが下働きがせいぜいで将来のことまでは考えられない。

先住民族の間では、女の子は、14、5歳で結婚するのが当たり前で、これも食べ盛りになる前の口減らしではないかと思うときもある。

ただ子だくさんが即刻悪いとはいえない。

平均して子どもが7人。生活は本当に大変だが、それはそれでにぎやかで良いし。子どもたちも、親がいかに苦勞しているかをよく理解しているから、早朝のご飯炊きから水くみ、掃除まで、本当によくお手伝いする。上の子たちは、下の子たちの面倒をよく見る。

貧困で崩壊する家庭もあるが、家族のきずな、地域の絆は貧困によってさらに強まることもあり、学校も、全員が行くのは無理だから、大概は長女や長男が家や畑を手伝って、下の女の子で勉強に興味のある子を、一人でも良いから小学校を卒業させるために、家族みんなががんばったりする。

そのせいで、MCLのスカラシップに応募する子たちの応募理由はほとんどが、将来良い仕事を見つけて、自分の親や家族を助けたい、兄弟姉妹を学校に行かせたい……。

ウェブサイト、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

また、山のコミュニティでは、本当にお互いに家族同士が兄弟姉妹のように助けあう。

産児制限が浸透し核家族化、個人主義化した都会から失われた愛が生きていて、それが子どもたちの心を真に育てている様子がわかる。(ここでは、避妊具も買えないだけに、子どもは生まれて当たり前前で、避妊失敗の産物ではない。)

こうした自立した子どもたち、互いに家族や友達通して愛し合い助けあうことを理解している子どもたち、極端な不幸を経験しながらも自殺することもなく、真に生き



る力を持っている子どもたち、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの子どもたちは、皆そうした子どもたちが多く、そこから先進国が学ぶべきこともほんとうに多い。

子育ては、競争原理に基づいた学校教育ではなく、愛と助け合いに基盤をおく、家庭と地域社会と大勢の子どもたちが共に外で思う存分走りまわって遊ぶ体験の中から生まれてくるのがよくわかる。

だが、やはり現代社会のなかで生きて行くには、識字や計算能力をはじめ、学歴や教育のあるなしが人生の後半を大きく左右させる。勉強が良く出来て、学歴が高い人々が、政府や企業のトップに立ち、政策や方針を決定し、高給に裏打ちされた安定した人生を送るのだ。

さらにそうした人々だけが、学費を払って子を大学までやらせ、縁故で地位を継続させていく様子を見ると、あまりの不平等にため息が出る。だから世界は戦争ばかりで、格差ばかりが広がって、良くならない？

そんな社会が、ミンダナオには明確に



広がっているのが見えるのだが、これはフィリピンの国内問題ではなく、実は先進国も含めた世界の構造的な問題であって、(先進国が後進国を搾取することから、経済覇権が成り立っている)日本という狭い壁の中に閉じこもって、世界を見ようとしない限り、理解することは不可能だろう。

そんなわけで、ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、極貧の子たちの中でもとりわけ不幸な境遇の子たちに、大学まで行ってほしいと思って作ったプロジェクトだが、全員が優等生でもないの、基本的に、極貧状態から脱して人並みな生活が出来、結婚して幸せになってもらうことを目指している。

それゆえ進級進学出来ない子たちにも力を注ぎ、短期教育や縫製や大工、農業訓練や修理工、ドライビングの技術を習得させて、少しでも有利に社会に出ていけるようにしてあげてから、社会に送り出すようにしている。



スカラシップ・里子支援の方法

郵便振替用紙に、「スカラシップ」または「里子」と書いて、支援額の一部を振り込んでいただければ、後日、現地から手紙やメールで支援の子を紹介させていただきます。学年、男女、境遇、年齢、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族など希望があればお書きください。出来るだけご希望に添う子を、紹介させていただきます。

紹介欄に載っている特定の「この子を支援したい」場合は、振替用紙の通信欄に子どもの名前を書いてお送りください。子どもの紹介は、ウェブサイトの「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にも順次、最新の情報を乗せていきます。入るのにパスワードが必要です。パスワードは、「mindanao」です。

奨学生の決定は先着順とさせていただきますので、サイトから「支援申し込み」をクリックして記入し、通信欄に希望の子の名前を書いてウェブメールしていただくのが一番早いと思います。折り返しスタッフから返事を送ります。すでに支援者が決まった子の場合は、ご相談させていただきます。

ウェブサイトに、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

スカラシップ支援・大学高校



Jhon Carson Awie

大学一年・マノボ族 18歳
母は死亡。父は病氣。2年コースを希望。
マノボの踊りのトレーナー



rosevina b. lumayon

大学一年・マノボ族 17歳
母は病氣、スカラシップで高校卒業
マノボの踊りのトレーナー IC希望



Cust Jade Montecalvo

大学一年・クリスチャン
父は死亡。母は不明。
苦勞して高校を卒業、生まれつき足が障害



Charlita L. Eli

大学一年・タガバワ族 21歳
山に住み、貧しく10人兄弟
学校の先生になりたい



Harish A. Hashim

大学一年・イスラム教徒
父は死亡、経済困窮
母も別の人と一緒に 7人兄弟



Jamer E. Apan

大学一年・マノボ族 19歳
父は山仕事、母は専業主婦
教師になりたい



Elyn Grace B. Lumogdang

大学一年・イロongo族 イグネシア教徒
父は障害がある。
両親では貧しくサポート出来ない



Gretchen L. Baylon

大学3年・カトリック 21歳
両親は離別し兄弟はバラバラ
先生になりたい



Riza L. Piang

大学一年・マノボ族
母はライ患者。父は山の農夫。
母の薬のために土地を売った



Abjera K. Matabalao

高校2年・マギンダナオ族 13歳
イスラム教徒 戦闘が絶えない地域
両親はいるが、生活は厳しい



Ivy B. Capawan

高校2年・カウロ族 18歳
山のバプテスト教会
両親はいるが8人兄弟で貧しい



Elmer B. Cababat

高校一年・ピサヤ族 13歳
両親はいるが、経済的に困窮
移民系クリスチャン

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」または「里子」と書いて一部振り込んでいただければ、支援学生を紹介。スカラシップは、機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、6月に成績表、8月に写真、12月に絵手紙が届きます。里子支援は、8月に写真。本人からは、12月に本人が描いた絵手紙が届きます。訪問の際は、自宅にご案内。支援停止は、いつでも可能です。

スカラシップ支援・大学高校



Mercy E. Palao

高校1年・マノボ族 11歳
両親はいるが、非常に貧しい
食べるのも厳しい。よい先生になりたい



Jenifer D. Cansad

高校1年・カウロ族
両親はいるが、山でわずかな自給地
非常に貧しい



James Loydd B. Perla

高校1年・マノボ族 13歳
両親に仕事がない
子どもを学校にやれず、経済的に困窮



Dayana C. Dampas

高校一年・マノボ族
両親はいるが、山で農業
6人兄弟で経済的に貧しい



Salome B. Tombalay

高校一年・マノボ族 13歳
12人兄弟で非常に貧しい
山岳地に住む。弁護士になりたい



Newerlyn M. Mumar

高校一年・マノボ族 12歳
父は死亡 経済的困窮
3食たべられない。先生になりたい



Normea M. Bateg

高校一年・イスラム教徒
6人兄弟で非常に貧しい
戦闘の絶えない地域



Jeck H. Cabudlay

高校一年・ピサヤ族 17歳
両親はいるが非常に貧しい
船乗りになりたい



Terisa A. Egaan

高校4年・マノボ族
貧しいが、何とか大学まで卒業したい
山岳地で非常に貧しい



Sandel E. Linao

高校一年・マノボ族
両親は離婚
母親だけでは貧しくて学校に行けない



Shella Mie S. Banan

高校一年・ピラン族 17歳
両親はいるが、土地は抵当にとられ
一日3食食べられない



Saima S. Mulilis

高校一年・マギンダオ族 14歳
絶えず戦闘に見舞われてきた
看護師になりたい イスラム教徒

子どもの紹介は、ウェブサイト 検索「ミンダナオ子ども図書館」の「スカラシップ・里子紹介サイトページ」に
さらに多く、順次最新の情報を載せています。入るためのパスワードは、「mindanao」です。
サイトからそのままメールで現地スタッフと、支援する子どものご相談と確定が可能です。

つばぶのミリス

松居 陽

一人ぼっちの庭に、朝日が昇る。小鳥がしばぶのミリスをついばむ。

愛には、欲求の対象も、執着もない。愛される者が、愛する者の中へと崩れ落ちる。対象が主体の中へと崩れ落ちる。それを否定できるものを残さず、全てをつなぐ愛だけが残る……

主体と対象は、恋に落ちることが出来ない。

それらは永遠に、橋をかけることの出来ない切れ目を境に、ただ憧れのまなざし



で互いを見つめ合う。

愛が橋をかけ、断片化にある孤立が、一体化にある喜びに道を譲ることを、日々待ち望みながら。でも、この切れ目に橋はかけられない。

切れ目があってからこそこの主体と対象だ。そう、切れ目は深く僕たちの経験の基礎に染み込んでいる。

愛するものと愛されるものは、根本から切り離されている。

彼らが本当に出会うことは、まずないだろう。

愛は、二人を隔てるこのむごい切れ目の死を意味する。それは、努力では達成できない。

分離を終わらせようとする努力そのものが、分離を強調し、分離に力を与える。なぜなら、分離などどこにもないからだ。そんなものは初めからなく、これからのない。分離は、幻想だ。幻想と戦えば、負けるしかない。

そんなわけで、われらが恋人たちは、知らずに自分たちで作った、橋をかけることの出来ない切れ目を境に、憧れのまなざしで互いを見つめ続ける。

彼らを助けることは出来るのだろうか？
一つになろうとする努力そのものが、よ
り彼らを突き放す。

このように生き、死んでいくのが彼らの運命なのだろうか？
出口はあるのだろうか？

あるが、それには死がかかわる。肉体の死ではないが、自我の死だ。切り離し、孤立させる全ての死、過去から運ばれてきた全ての死、未来へと映し出されていく全ての死。愛という概念そのものの死。そしてついに、愛されるものの死、愛するものの死。

君と僕の死、それと共に僕たちの間に入り込む全ての死。無への落下、未知への突入。

リスク

リスクを冒すものは、味わうかもしれない。一人ぼっちの愛の、甘くシンプルなき喜びを。

見て！小鳥が露にぬれた芝生を飛び跳ねながらさえずり、私たちが地球と名づけたエデンの園にうたた寝る生き物たちを、朝日が暖かく呼び起こす。そこには、孤独も分離も見当たらぬ。

全ての中に全てがあり、そこらじゅうが母、そこらじゅうが故郷だ。

当たり前前ことに気づき、笑みが漏れる。
僕は君を見つけたのではなく、ずっと避
け続けていたことを認めただ。

君は、そこにいるんじゃないって、ここに
いるんだ。

君は、経験そのものとしての僕の、一部
なんだ。だから、僕は君を愛してはいない。
愛する僕と、愛される君はいない。
君は、愛するものの一部だから……

大いなる探求は、今、ここに終わる。

ここには愛しがなく、君しかいない。
君は僕が今感じているもの、君はどこ
からともなく泡立ち、どこへともなく解
けていく思考、君はあの小鳥、草につい
た露、太陽とその輝きの全て。

僕たちは、こうして時を越えて縛られ
ている。

僕たちは、別れない。別れられない。今も、
これからも。

一人ぼっちの庭に、朝日が昇る。君は
僕と一緒に、全てを目の当たりにする。



ウェブサイト、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

里子支援・小学校



Aprilyn P. Santa Ana

小学2年 イロongo族 カトリック
母親は殺害され、そのショックで
父親は立ち上がれない



Elmie L. Salana

小学一年・マノボ族
山で非常に貧しい。3食たべられない。
9人兄弟の7番目



Ali Gayansong

小学一年・マギンダナオ族
イスラム教徒 母は死亡
父親は別の女性と一緒に遠くにいる



Jan Mark Caliguid

小学一年・マノボ族
父は死亡。8人兄弟の7番目
MCLにひきとる



Genevieve L. Elando

小学5年・マノボ族 15歳
両親はいるが土地はなく
8人兄弟で生活困窮



Ariel B. Pableo

小学一年・マギンダナオ族
イスラム教徒、生活は貧しく
戦闘が絶えない地域



Johnrey L. Canumay

小学一年・ピサヤ族
両親はいるが
7人兄弟で学校に行かせられない



Ronald G. Tula

小学2年・マノボ族
両親はいるが、山奥の非常に貧しい先住民族
お弁当を持っていけない



Renelyn D. Egaan

小学一年・マノボ族
両親はいるが
マノボ族の山奥の集落で貧しい



Habiboddin S. Mohammad

小学5年・マギンダナオ族 13歳
イスラム教徒 両親とも亡くなり
親戚の所にいるが非常に貧しい



Wildon E. Ambis

小学2年・マノボ族
両親はいるが、8人兄弟で
山の奥の村で貧しい



Samira M. Musa

小学5年・マギンダナオ族 13歳
戦闘の絶えない地域
両親はいるが貧しい 先生になりたい

子どもの紹介は、ウェブサイト 検索「ミンダナオ子ども図書館」の「スカラシップ・里子紹介サイトページ」に
さらに多く、順次最新の情報を載せています。入るためのパスワードは、「mindanao」です。
サイトからそのままメールで現地スタッフと、支援する子どものご相談と確定が可能です。

ギンギンたちは、大岩のうえに登ると、はいつくばったまま、ソートと岩から頭をのぞかせた。

「ロラロラロラ ロラロラレ ロラ
ローラーローラー ロラロラレ ヘイ！」

「どうやら、小学校の子どもたちが十人あまり、午前の授業を終えて帰ってくるころのようだ。」

「いいなあ、あの子たち。学校に行けて、お昼ご飯を食べに帰る家もあって。」

クリスティンがため息をついていった。
「わたしたち、学校行けないもんね。」

「お弁当ないもんね。」

ジョイジョイがいった。

すると、ギンギンが、ちよつと強い調子でいった。

「山菜売れなければ、夜ご飯だって食べられないんだからね。」

「そうだよね。」

歌声は、だんだんこちらに向かって近づいてくる。小学校の子どもたちだ。

野原の花をつんで耳にさしたり、小枝をふりまわしたり、跳んだりはねたりしながら近づいてくる。そのなかには車いすの少女もいて、他の子たちが、かわるがわる後ろから押している。

子どもたちは、大岩の手前までくると立ち止まった。

髪の毛の縮れた小柄な少女が、ちよつとかすれた声でいった。

「この岩、妖精の住みかなんだよ。」



子どもたちのなかの半分いじょうは、色も黒いし、何人かは髪の毛もぢぢれていて、どう見ても先住民族だ。

「昔はこのまわりで、マノボ族の人たち、踊ったり歌ったりしてたんだって。」

「酋長を囲んで、お祈りもしたんだよ。」

「インカルばあちゃんいってたよ。今もこの岩には、妖精が住んでいるって。」

「酋長の名前は、マオンガゴン！」

ちよつと年上の男の子が、歌うようにいった。

「あれ！」

クリスティンは、思わず耳をうたがった。

ばあちゃんが、いっていた言葉が、記

憶のなかによみがえってきたからだ。

「たしかばあちゃんは、こんな事をいっていた。『マオンガゴン酋長は元気かね。会ったら、わたしからもよろしくって伝えておくれ。もうじきそっちに行く日も近いだろうって』……。」

さっきの男の子が、今度は神妙な顔を

していった。

『タビタビ ポー』って言って、ここは通らなくちゃだめなんだ。特に夕暮れ時にはね。」

「タビタビって、どういう意味？」

「お願いします、通してね。という意味。」

「そういうと、子どもたちは、大声で」

「タビタビ ポー タビタビ」

「タビタビ ポー タビタビ」

「タビタビ」

「タビタビ」

といいながら、大岩の前を通りはじめた。

ギンギンたちは、大岩の上から、わずかに頭をだして、子どもたちが通りすぎ

て行くのを見まもった。

ギンギンが、ひそひそ声でいった。

「あの子たち、みんな同じリュック

しよっているよ。」

「本当だ。赤と緑の布地に黒でMCLって書いてある。」

学校帰りの子どもたちは、大岩のそばを通りぬけると、歌いながら、お昼を食べに帰っていった。

ギンギンとクリスティンとジョイジョ

イは、岩の上から子どもたちを見おろした。そのようすがあんまり楽しそうなので、ギンギンは、思わずため息をついていった。

「わたしも学校、行きたいなあ。」

もし大学卒業できたら、もっと母さん

たち、助けられるのになあ。」

「姉ちゃん、大学まで考えているの。小

学校すら大変なのに……。」

クリスティンがいった。

「夢は、高く持つものよ。」

ギンギンは、そうはいったものの、ど

うしたら大学まで行けるのか、けんとうもつかなかった。

小さなジョイジョイも、クルクルした

目を見開きながら、うらやましそうにいつ

た。

「いいなあ。わたし、小学校だけでもいいきたいなあ。字が読めて、計算できて。」

「計算だったらわたしができるよ。」

クリスティンがいった。

「カンコン一東、5ペソ。」

タクワイ一東10ペソだから、三東で

30ペソ。

パコパコ一東5ペソだから、二東で10ペソ。

あわせて45ペソ。」

三人は、大岩からとび降りると、おい

てあった山菜のつまったタライを頭にのせて、岩から離れて歩きはじめた。

町までは、まだまだ遠い。 (続く)

ミンダナオ子ども図書館・支援方法

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日3食たべられないときと、
お金がなくて、学校に行けないとき
病気になってもお医者さんに行けないとき・・・



1. 医療や読み語り活動を、支援してくださる方々へ・・・自由寄付

自由寄付は、戦争難民救済や医療、広範囲に広がる村々とのコミュニケーション。支援者に紹介する以前の成績が不安定な極貧の子たちの学費。片親や孤児、障害を持った子などが120名あまりが暮らす本部、および学校に遠くて通えない子どもたちの山の下宿小屋、大学生たちの町の下宿施設の運営費や食事代など・・・活動費の根幹を支える寄付です。
機関誌の購読料のつもりで、少額でも結構です！よろしくお願ひします。
機関誌は、4月、6月、8月、10月に加え12月にクリスマス新年号を年五回お送りしています。

2. スカラシップ支援（大学生と高校生）・・・年額60000円（月額5000円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて一部振り込んでいただければ、支援学生を紹介。機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、6月に成績表、8月に写真、12月に絵手紙が届きます。文通も可能。訪問の際は、自宅にご案内します。支援停止は、いつでも可能です。支援は、授業料の他に、学用品代、米代、下宿代、各種プロジェクト代、お小遣いに使われます。大学生は、年額6万では無理ですが、高校のスカラシップや自由寄付で通えるようにしています。

3. 里子支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）

振り込み用紙に「里子」と書いて、一部振り込んでください。8月に写真。本人からは、12月に本人が描いた絵手紙をお届けします。支援停止は、いつでも可能です。
2ヶ月に一回、僻地の学校を訪問しては、学用品を支給し、プロジェクト代や場所によっては、お弁当用の米を支給しています。訪問の際は、村の自宅にご案内しています。

4. 保育所・下宿小屋建設・・・30万円（分割も可能）

振り込み用紙に「保育所」と書いて振り込んでいただければ幸いです。戦闘や政情不安定などの影響で、翌年にずれ込むこともあります。建設結果はウェブサイトで報告すると同時に、毎年10月の機関誌とともに、その年の保育所の状況写真をお届けしています。

5. 植林環境支援・・・6万円（コムの木600本、1ヘクタール、現地の作業代）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、生活自立支援です。参加も可能です。

6. 古着などの物資支援・・・ウェブサイトを参照。手渡し参加も可能です。

ウェブサイトには、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

郵便振替口座番号 00100 0 18057 : 加入者名『ミンダナオ子ども図書館』

インターネットバンキング *銀行名 ゆうちょ銀行 *金融機関コード 9900

*店番 019 *預金種目 当座 *店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） *口座番号 001857

ミンダナオ子ども図書館は、フィリピン現地法人 NGO です。
問い合わせは、メールが最適 mindanao@zap.att.ne.jp
電話は、080-4423-2998（松居友：日本および現地転送携帯です）
現地携帯 09219603640 フィリピン国内ではこの番号に
日本事務局：Fax 専用 093-473-7710
現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City N. Cotabato 9400 Philippines
<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>